

『君に降る白』
著：朝丘 戾
ill：麻生ミツ晃

成瀬さんから“今夜はガーゼのパジャマで”と予約が入ったのは、精神的にすっかり疲れきった三月半ばの金曜の夜だった。

初めて服の指定が変わったので、僕は着替えてから彼の前に立ち、「どうですか。パジャマはこの青チェックの柄物しかないんです。無地の方が好みでしたか」と確認をした。だが成瀬さんは最初会った日のように、ベッドへ腰掛けたままぼうっと僕の姿を見上げ、黙ってしまった。くちを薄く開いてうっとり目を細める。

言葉で伝えるより如実に感想を訴えてくる瞳が無(む)垢(く)な子どものようで、僕は気抜けしてしまった。安堵は体内に溜まった疲労を一瞬で打ち砕き、空気の中に溶かした。

気づくと、僕は成瀬さんの膝の上に跨り、両腕を彼の首にまわして脱力していた。

「あの、藍クン。……ここでふたりでいる間、僕はキミを……好きに、していいんですよ」

しかしそれを聞いて僕は上半身を離し、今のは彼の声だったのか、確認するように顔を覗き込んでしまった。頬をやや赤く染めて視線を泳がせ、唇を一字にぎつく結んでいる。

「……ええ、そうですよ。好きにしていますよ」

「欲をぶつけても怒られないし、たとえキミが不快に思っても、責められることはない？」

「今更です」

パジャマの方が興奮するのか。そんなしようもないことを、ぽつんと考えた。

向かい合って沈黙していると、成瀬さんは俯いて僕の首元を長い間睨むように見つめてから、ゆっくり右手を持ち上げて指先で喉に触れてきた。ほんの僅かしか触れていない上に彼の指が震えているものだから、鎖骨まで下りてゆく間、くすぐったくて右肩が一度跳ねた。

ボタンをつまんで、ひとつはずされる。もうひとつ。

成瀬さんは呼吸も忘れて酷く緊張した面持ちで頬を強張らせ、硬直した上半身を傾けると、僕の左の首筋に唇を近づけた。

……ところが、そこからまた長い沈黙が待っていた。

僕の腰を押さえていた成瀬さんの左手に熱が増し、じわりと汗まで滲んできたので、さすがに心配になって「大丈夫ですか」と呟いたら、彼はほぼ同時に僕の首筋に突っ伏して大きくて長い溜息をはああとこぼした。なにを言うかと思えば、

「……すみません。出来ません。……申し訳ございません」

などと謝罪する。

「藍クンはとても魅力的で、色っぽくて、可愛くて、素敵です。……どうしようもないほど、綺麗で、肌も白くて、美しいです。悪いのは僕です。僕が、悪いんです」

僕はベッドサイドのライトの光を瞬きもせず真っ直ぐ見つめ、目の表面が乾いて痛みを感じてから瞼を半分閉じた。唇の横で揺れる、成瀬さんの髪の香りが甘い。

「なにが、どう悪いんですか」

「……客という立場を、利用しようとしたから」

「利用すべきなんですよ。貴方は損しているんです。もうずっと、知り合ってから半年以上」

「いえ、損じゃありません」

「じゃあ僕を抱こうとしたのは、どんな気紛れだったんですか」

成瀬さんはしばし間を置いて、再び重い唇を開いた。

「……考えていたんです。藍クンと別れる前に一度だけ、多少の無茶をしても一生にひとつの思い出をつくって、死んでゆくのも悪くはないかなと」

「自殺でも考えているんですか」

「ち、違います。要するに、その……僕はもう、藍クンのような子には会えないだろうから」

「僕が仕事を辞めても、成瀬さんはべつの子を指名するんでしょう」

「しませんよ」

「人生まだまだ長いです。一度味を知ったことは、必ず繰り返すに決まっています」

「いえ。……実は以前、藍クン以外の子と一時間過ごしてみたんですけど、慣れているというかペースが合わないというか。……セックスしないと云ったらえらく怒って、苦痛でした」

「ほら。その調子で数打てば、どうせまたペースの合う子に当たって幸せです。解決です」

僕は成瀬さんの頬をぎゅうとつねった。成瀬さんは「いた」と目を瞑ってから、続けた。

「……残念ながら、僕はそこまで神経図太くないんです。そのひとりに出会うため“セックスしないとはい”と一時間説教され続けるのは、仕事の接待より辛いです」

成瀬さんが肩を落として途方に暮れた。年端もいかない男に怒鳴られ、床に正座して謝っている彼の姿を想像した。思わず、僕は吹き出してしまった。

成瀬さんは目を丸くしたが、僕の笑い顔を見てほっとしたのか、情けなく苦笑いしたのち僕の身体を両腕で抱き締めた。ごろごろ頭を揺らして、甘えてくる。

「……藍クンが最後でいい。ばかなことを考えてごめんね。やはりキミの心を無視して触れ合うのは本意じゃなかった。そんなのは幸福でもなんでもありません。いい思い出にもならない」

この人は僕に心があるという前提で接してくる。一度だって玩具として扱ったことはない。

成瀬さんの後頭部の髪に左指を通すと汗ばんでいた。彼は「あ、汚いですよ」と慌てたが、僕は構わず梳き続けた。そしてやがて“佐藤店長のセクハラに抵抗を抱くのは、成瀬さんと知り合ったせいでもあるんじゃないか”と、思い至った。

佐藤店長は今日も僕を触った。尻を掴んで抱き寄せ、エプロン越しに股間を撫でてカチを探ろうとした。突き放す瞬間、いつも酷い嫌悪感と、猛烈な哀しみを味わう。

……今まで性欲は本能であるという事実以外、深く考えたこともなかったのに、成瀬さんの感覚に流されているうち、性格が似てきたのかもしれない。

もともとあった佐藤店長に対する信頼に加え、成瀬さんから教えられた、愛情や思いやりの下に交わされるセックスが、僕の心を乱すのだ。

「藍クン、もう、いいです」

ふいに成瀬さんは身体を離して僕の左手を取り、匂いをかいだ。すぐに顔をしかめて「待っていてください」と膝から僕を下ろし、バスルームへ移動する。

疑問に思いつつ待っていたら、ジャーと水の弾ける音が響いたあと、白い濡れタオルを持って戻ってきた。僕の正面に膝を突いてしゃがみ、ほわりと微笑んで左手を拭き始める。

「緊張しすぎて久々に汗をかきましたから。僕に触ったら藍クンの手が汚れます」

……啞然とした。汚い。誰が。貴方が……？

「こんな汗、汚いうちに入りませんよ」

「でもちょっと匂うもの」

羞恥心を抱き、いたたまれない様子で苦笑いする成瀬さんが僕の胸の奥底を貫いた。

ほとんど無心に、

「雫のような大粒の汗をまき散らす人もいるし、唾液や精液の方がよっぽど匂います」

そうくち走ってから我に返った。

成瀬さんは目を見開き、明らかに傷ついた顔をした。

今のはどう考えても客に言うべき言葉ではなかった。僕は狼狽(うろた)え、自分の失言を後悔した。

数秒顔を見合わせて時を止めたが、この淀んだ空気を先に消そうと努めたのは、懸命に笑顔を繕って明るさを演じた、成瀬さんだった。

「……うん。でも僕は藍クンを少しでも、汚したくないんです」

親指から小指まで、丁寧にタオルで挟んで拭(ぬぐ)ってゆく。爪の間まで、傷つけないように汚れを取ってくれる成瀬さんの指は佐藤店長の手と違い、とても繊細で臆病だった。

以前僕の左手の上に放たれた白濁した液を見た客が、自分のものにも関わらず「汚ねえ」と怒鳴って払いのけたことがあった。行為が終わった途端僕の身体を汚いと感じ、顔をしかめる客は多い。床に散ったそれを舐めると命令し、四つん這いになる僕を腹を抱えて笑う客もいた。

こんな真新しいタオルで目にも見えない汗を拭い落としてくれたのは、この人だけだ。

「……成瀬さんは、なんで僕を選んでくれたんですか」

問うてみると、彼は「ンー……？」と含み笑いした。

「お店で店員さんのリストを見せてもらった時、写真の中で藍クンだけがつまらなそうな顔をしていたからですよ」

「意味わからないです」

最初に撮られたプロフィール写真だ。“生意気そうでいじめたくなった”とよく言われる。

僕の客が鬼畜ばかりなもの、あの写真のせいなんだろう。

「僕は一目見た瞬間、目が離せなくなったんです。他の子達は全員笑顔を浮かべているのに、藍クンだけぼんやり無表情で、どこか哀しげでした。……眺めていたら、いつの間にか藍クンのことを選んでいました」

穏和な彼の微笑が、僕の心をゆっくりなぞった。

……オーナーに誘われて流されるままバイトを引き受けて、その日のうちに空っぽな感情でカメラのレンズの前に立った。あんなしょうもない写真から、僕の奥にひそむなにかが、彼の目には見えたというのだろうか。

無愛想だと責めもせず、ただ抱き締めるためだけに繰り返し指名して。

クリスマスプレゼントを買ってきて、手を繋いで雪を見るのを夢見て。

「成瀬さん」

僕はベッドから下りて成瀬さんの前にしゃがみ、彼の頬を両手で包んだ。キョトンとした目の奥を至近距離で探ってから、唇を寄せて一瞬だけくちづけた。

僕の柔らかな乱暴が、彼の呼吸を吸い取った。

成瀬さんの唇は指と違って冷たかった。汚れきった僕が成瀬さんに触れたら、彼まで汚してしまう気がして、すぐに手を離れた。でも、成瀬さんは咄嗟に僕の指を掴んで引き止めた。

「なぜ」

酷く戸惑って、眉間に寄せたシワを震わせる彼の頬が、夕日色のライトに溶けている。

「お礼です」

「お礼……？ ——……僕がお客だから、ですか？」

本文 p100～106 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>